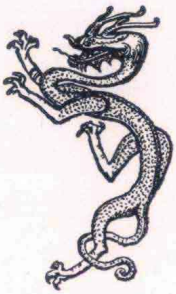

古典の細道

新潮選書

白洲

古典の細道

白洲正子

新潮選書

古典の細道〈新潮選書〉

昭和四十五年十二月十日 印刷
昭和四十五年十二月十五日 発行

定価三六〇円

著者 白洲正子
発行者 佐藤亮一
活版 大日本印刷株式会社
製本 大進堂製本所

郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一
発行所 株式会社 新潮社
電話東京(〇三)二六〇局一一一一
振替東京八〇八番

© M. Shirasu 1970 Printed in Japan

(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

目

次

白鳥の歌——倭建命——……七
昔男ありけり——在原業平——……二七
夢に生きる女——小野小町——……四五
大原御幸——建礼門院——……六三
補陀落渡海——平維盛——……七九
西国巡礼の祖——花山院——……九三
旅の芸術家——世阿弥——……一〇九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

琵琶の名手——蟬丸……一二五
花がたみ——継体天皇……一四一
うわなりうち——磐之媛皇后……一五七
木地屋の祖神——惟喬親王……一七五
忍——東福門院……一九一
あとがき……二〇七

古典の細道

白鳥の歌

倭建命

「甲冑をきた武人」埴輪（東京国立博物館蔵　坂本万七撮影）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

京都から伊勢へ行く途中、亀山のあたりで、ふと思いついて日本武尊の御陵によってみた。鈴鹿の麓、能褒野にあり、一名「白鳥陵」とも呼ばれる。尊の霊が、白鳥と化して、飛び立ったという伝説から出た名称で、白鳥はここから大和の琴引原へ飛び、更に河内の古市に向い、やがてそこからも飛び去って、行き方知れず失せたという。

童話のようにそこはかとない物語が、いつしか私の心の中に住みつき、一度はお墓をたずねてみたいと思っていた。国鉄亀山駅の前を左へ折れ、爪先上がりに行くと、程なく広々とした丘陵へ出る。このあたり一帯を能褒野というが、鈴鹿山から自然になだり落ちるゆるやかな傾斜は、いかにものぼの（登野）の名にふさわしく、豊かに水をたたえた安楽川が、北から南へうねうねと流れ、その向うに大きな前方後円墳が望める。まわりには、人家もなく、人影もなく、急に現代から古代の世界へわけ入るような心地がした。

御陵に隣り合って、日本武神社があり、お詣りした後で私は、お堀の跡に坐ってお弁当を喰べた。

折しも秋のさなかのことで、一点の雲もなく、目の前の土手に、赤まんまが咲いている。とんぼが飛んで来て、手の甲にとまった。何というのどかな、だが、あまりにのどかすぎることは、時に寂しさをさそう。私はしきりに、誰一人みとるものもなく、大和の空を恋いつつ死んだ皇子の上を想った。

やまとは　国のまほらば　たたなづく　青垣　山こもれる　大和し　うるはし

鈴鹿の連山を背景に、伊勢までさえぎるもののない風景は、まことにこの絶唱にはふさわしい地形のように見えた。が、この有名な歌は、日本書紀では、景行天皇の国褒めの歌となり、古事記では、日本武尊の望郷の歌となっている。どちらが正しいか、私は知らない。ただ置かれた環境によって、歌の表情がかくも異なるのは、驚くべきことではないだろうか。そういえば、日本武尊自身、書紀と古事記ではぜんぜん別の姿を現わす。しばらく、古事記を元に辿ってみよう。お名前もここでは倭建命と書き、その方が古風で、親しみが持てる。

倭建は、またの名を倭をぐな（男具那、童男）といった。小碓命が本名で、をぐなは幼名であろう。

ある時、天皇が、美濃の国造の娘を召した時、兄の大碓命を使者に立てたが、命は途中で姫を奪い、別の女をさし出したので、天皇は不興であった。それを畏れてか、大碓命は宮廷に現われない。天皇は、倭建に命じて、よくさとすようにいわれた。五日経っても出仕しないので、建に聞いてみると、明方厠に入った時、つかみかかって殺してしまった、と答えた。

あまり乱暴な仕打ちなので、畏れをなした天皇は、九州の熊曾を退治に遣わしてしまう。その

時、倭建は、髪をみずらに結っていた。未だ十六歳の少年だったのである。出発に当って、姨の倭比売命を伊勢神宮にたずね、御衣を頂いて行く。倭比売は、伊勢の斎宮で、その御衣を給わるというのは、伊勢大神の神威、即ち祖先の魂を身につけることを意味した。

やがて、九州へ着いた皇子は、熊曾建の館へ行ってみると、厳重に兵士達がとりかこみ、新築祝を行う所である。皇子はしばらく家のあたりをうろつき、その日が来るのを待った。当日になると、童女のように髪を垂らし、姨の衣装を身にまとって、女に化けて宴に列なり、熊曾建の歓心を買った。そうとも知らぬ建兄弟は、自分達の傍に侍らせて、酒盛りを楽しんでいたが、宴たけなわとなった頃、皇子は突然刀をぬき、兄の胸をさし通した。驚きあわてて逃げる弟を、返す刀で切りつけたが、その時苦しい息の下から、少時お待ち下さい、伺いたいことがある、というので、力をゆるめてやると、命の名前を聞いた後、このようなことを述べた。

「西の方に我らをおいて、強い人間はおりませぬ。然るに、大倭の国には、我らに優る強い男がおいでになる。この上は、御名を奉りましょう。今より後は、倭建の御子と名のり給え」

倭をぐなは、それ以後、建を称するようになる。その帰途、出雲に立ちより、もう一人の建を滅ぼした。この時も、偽の木刀を作り、剣を交換しようといって、互いに取りかえた後、出雲建を切り殺した。建というのは、強い男の総称で、或いは首長をそういう名で呼んだのかもわからない。そして、刀を替えるというのは、信頼を現わす行為であったろう。皇子がいつも策略を用いるのは、卑怯なようにみえるが、それは後世の考え方で、人をだますことが出来るのは、智略

にすぐれた武将と考えられていた。

やつめさす　出雲建が　佩ける刀
つづらさはまき　さ身なしにあはれ

葛を巻いた木刀とは知らなかった愚か者めが、というほどの意味である。

命はめでたく大和へ帰還する。ここまでが倭建命の、いかにも建らしい武勇譚で、この後、命の運命も性格も、がらりと変ってしまう。休む間もなく、今度は東夷を滅ぼすことを命ぜられ、再び倭比売に会いに行くが、前とちがって命はしきりに愚痴をこぼす。鬼をもひしぐ英雄が、だんだん人間らしくなって行くのである。

天皇は、自分に死ね、と仰せられるのであろうか。西方の敵を平らげて、未だいくばくも経たぬというのに、兵士も充分給わらず、また東夷を討てといわれる、云々と、涙を流して訴えるので、倭比売は命に草薙の剣を与え、まさかの時は「この袋の口を解き給え」といって、守袋を餞別に送った。

命は、伊勢から尾張へ出、そこで美夜受比売（みやずひめ）に出会う。天皇や皇子が、行く先々で、土地の豪

族の姫君と交わるのは、征服したことのしるしであり、恭順の意を示すことの、一つの儀式であったかも知れない。求婚はしたものの、すぐには結婚せず、凱旋のあかつきに晴れて結ばれることを誓い合う。これも成功を期する為の呪いの一種であったろう。

そうして命は相模の国へ向う。そこの国造が、いつわっていうには、野原の中に大沼があるが、沼の神が災いをして困る。助けて頂けまいか、と頼むので、命が野原の中へ入って行くと、国造は四方から火をかけ、焼き殺そうと計った。で、命は例の袋の中から火燧石を取り出し、向い火を放つと同時に、剣をもって草を切りはらい、無事に脱出することを得た。以来、この地を「焼津」という。

それより関東に入り、走水の海（浦賀水道）を渡った時、浪が高くて、船が進まなくなった。そこで、后の橘比売命が、「御子に易りて海の中に入らむ」と、「菅畳八重、皮畳八重、絁畳八重を波の上に敷きて」入水し、船は安全に岸につくことが出来た。畳を敷くというのは、当時の巫女の作法であろう。沈みながら姫はこのように呼びかけた。

さねさし　相模の小野に　燃ゆる火の
火中に立ちて　問ひし君はも

命は国々の「荒ぶる神」を平らげ、足柄山にさしかかった時、坂の神が白鹿に変じて現われた。

丁度、食事の最中だったので、喰べ残した野蒜を投げつけると、忽ち鹿の目に当って死んだ。峠の上からは、相模の海が見渡せたので、命は橘比売を偲び、「あづまはや」と叫んで泣き、それよりこの地方を「あづまの国」と呼ぶようになった。

ついで甲斐の国へ廻り、酒折宮によった時、

新治　筑波をすぎて　幾夜か寝つる

と歌うと、傍にひかえた御火焼の翁が、

かがなべて　夜には九夜　日には十日を

とつけた。とっさの機転を、皇子は愛でて、翁を東の国造に昇進させた。そこから信濃へ出、坂の神を退治た後、尾張の美夜受比売のもとに還る。姫は喜んで迎え、命に盃を捧げたが、ふと気がつくと上着の裾に月の物がついていた。

ひさかたの　天の香具山　利鎌に　さ渡る鵠　弱細　手弱腕を　枕かむとは　我はすれど
さ寝むとは　我は思へど　汝が著せる　襲の裾に　月立ちにけり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co